学校だより
神橋
１０月号

令和４年９月３０日
横浜市立神橋小学校

「學」

校長　判治　珠美

　まだまだ残暑が続きそうですが、朝夕は秋の気配が感じられるようになりました。校内でも、鈴虫の音色が涼やかに聞こえています。今２年生は、生活科の学習で、生き物への関心が高まり、休み時間になると虫取り網を持って校庭を駆け回ったり、世話をしたり、登下校時に虫かごを大事そうに抱えていたりする姿を見かけます。教室には、ダンゴムシやバッタ、トカゲなど、いろいろな生き物がいます。そんな２年生の教室に鈴虫がたくさんいます。鈴虫をたくさん育てている近隣の方が、子どもたちのためにと、持って来てくださったのです。

　さて、タイトルの「學」という字です。昔は「学」をこのような字で表していました。下半分は「子」で、今と変わりませんが、上半分は子どもがどのような場で学ぶのかを表しているそうです。真ん中にある「メ」２つは、人と人とが交わることを意味していて、それを囲っている両側は、大人の手を表しているそうです。つまり、子どもは大人の手に守られて（安心して）、人と交われるような場で学ぶ、ということだそうです。（参考：『学力テストでは測れない　非認知能力が子どもを伸ばす』中山　芳一著　東京書籍）

　コロナの感染者数が減少傾向になり、子どもたちの学びも少しずつ以前のように、協働で学ぶことができるようになってきました。また、近隣や専門家の方などを招いたり、訪ねたりして直接学んだりする機会や、実際に本物と出会ったり、体験したりする機会なども増えてきました。その中で子どもたちが、主体的に人やものとかかわっていくことが豊かな学びにつながります。そのためのコーディネートや場づくり、何より子どもたちのやる気スイッチを押すのが、私たち大人の大事な役割で、まさに「學」の上半分なのだと思います。

　「學び」の深まりが楽しみな秋です。